
魔法少女リリカルなのはM E G A M A X S A G A

ゼロディアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはMEGAMAXSAGA

【Nコード】

N9302Y

【作者名】

ゼロディアス

【あらすじ】

ベリアル銀河帝国を壊滅させて早数ヶ月、ゼロが結成したグレンファイヤー、ミラーナイト、ジャンボット、そしてウルトラマンゼロのウルティメイトフォース・ゼロはダークロプスゼロと遭遇し、ロプスゼロの力により異次元へと飛ばされる。

そこは魔法、スーパー戦隊、仮面ライダー、星の戦士達、魔弾戦士、その世界のウルトラマンが存在する世界……。

魔法少女リリカルなのはMEGAMAXSA、始まります。

これはゼロシリーズのリメイク版です。

第1話 『ウルティメイトフォース・ゼロ』（前書き）

ゼロシリーズのリメイクです。
ゼロなどは大丈夫な筈……。

第1話 『ウルティメイトフォース・ゼロ』

ベリアル銀河帝国を壊滅させ早数ヶ月。

光の国のウルトラ戦士、ウルトラセブンの息子「ウルトラマンゼロ」は別の宇宙で出来た仲間、赤い炎の身体を持つ炎の戦士「グレンファイヤー」、鏡を操る緑の線が身体にある銀色の鏡の騎士「ミラーナイト」、赤と白の巨大な口ボ鋼鉄の武人「ジャンボット」達と共に結成した新しい宇宙警備隊「ウルティメイトフォース・ゼロ」の4人はある小惑星に降り立ち、4人は話しあっていた。

『これにてパトロールは終了だな』

「ああ、ジャンボット。一旦光の国へ帰らねえとな」

グレンファイヤーは大きく欠伸し、早く帰るように言う。

「早く帰ろうぜ、こんな所いたら風邪退いちゃう」

だがその時、こちらに幾つかの飛行物体が接近しているのが見えた。

「待てグレン！ こっちになにか近づいている！」

「あん？」

ミラーナイトの言葉で、グレンファイヤーは上を見上げると1つ目の黒とオレンジの身体を持つ機械巨人……「ダークロプスゼロ」が腕をし字に組みあわせて必殺光線である「ダークロプスゼロショット」をゼロ達に放った。

「……ぐわあああ！！！！？」

「……」

「くっそ、ダークロプスゼロだと!？」

ダークロプスゼロは胸部を変形させ、「デイメンジョンコア」と呼ばれるものを出し、そこから相手を次元の彼方にまで吹き飛ばす超時空波動光線「デイメンジョンストーム」が放たれ様としていた。

「させるかよ!!」

「先制攻撃たあやってくれんじえねえか!! ファイヤースティックー!!」

ゼロと炎のスティック型の武器「ファイヤースティック」を持ってロプスゼロに攻撃仕掛けるが、ロプスゼロは素早い動きでゼロとグレンファイヤーの攻撃を後退して避け、デイメンジョンコアにエネルギーが充填される。

そしてデイメンジョンコアから嵐を巻き起こす様な「デイメンジョンストーム」がまずはゼロとグレンファイヤーに放たれる。

「ぐわああああ!!?!？」

「ゼロ!!」

『グレン!!』

ジャンボットとミラーナイトがどうにか2人を助け出そうとするが、彼等もまたデイメンジョンストームに巻き込まれてしまい、ウルティメイトフォース・ゼロはデイメンジョンストームによって割れた空、次元の彼方へ飛ばされてしまった。

＊

此処はゼロ達がいた世界にあった地球とは別の世界の地球……。

その地球の「海鳴市」のある公園で、2人の少年が倒れていた。

「つてて……んっ？」

その少年は顔が若干「DOG DAYS」の「シンク・イズミ」に似ていたが、彼よりも凜々しい顔をしていた。

少年は隣で眠っている少年の姿を見る。

その少年は「フェイト・ゼロ」の「ランサー」に似ており、一向に目を覚ます気配が無い。

シンク似の青年は自分の身体を見るや否や、目を見開きつつ顔をペタペタ触る。

「俺……地球人の姿になってんのか……？」

実はこの少年、お気づきになってる方もいるやもしれないが、ウルトラマンゼロが地球人の姿になったものだった。

「じゃあこいつは？」

隣の少年は誰なのか揺さぶって起こして見る事に。

「うつ……んっ？　だ、誰だ貴様！？　こ、ここはどこだ！？　みんなは……！？」

目の前の人物がゼロである事に気付かず、ミラーナイトはゼロを睨みつけ身構えた。

「その声からしてお前、ミラーナイトだな」

「なぜ私の正体を……？　まさか、ゼロ？」

隣で眠っていた青年はミラーナイトが人の姿になったものである。

「グレンとジャンボットは？」

「分からねえ、あいつ等とははぐれちゃったみてーだな」

兎に角、此処にいても始まらないのでミラーナイトとゼロは歩き始めることに。

「だが、ゼロはまだ地球の年齢ではそこまで小さかったのだな」

「それを言うのならお前もだろ」

ミラーナイトとゼロの見た目は小学生ほどである。

「しかし、ここは見た所、親父達の言ってた地球だな」

ゼロやミラーナイトにとって、今目に映るものは全て珍しいものばかりだった。

「そう言えば、地球人と出会った時、名乗る時はなんと名乗る？」

流石に我々の名前をそのまま使う訳には……」

「そうだな……」

そこで2人は考えた結果、ゼロは以前同化していた人間の名前と、セブンが地球人の姿になった時に使っていた名前の苗字をとって「モロボシ・ラン」と名乗る事にし、ミラーナイトは「騎士^{きし}鏡太^{きやうた}」と名乗ることにした。

*

その頃、グレンファイヤーとジャンボットは……。

グレンに至ってはランや鏡太と同じ様に人の姿になっており、フェイトシリーズのギルガメッシュに似ているが髪の色は赤の少年になっていた。

彼は森の中で倒れており、そこに1人の青年が駆けつける。

「グレン！ おいグレン！」

ジャンボットと同じ声を発する青年。

「うーん……。宇宙帝国ザンギャックとの戦いで失われたスーパー戦隊の力を受け継いだのは……とんでも無い奴等だった！！」
「どんな寝言だそれは！？」

グレンファイヤーの有り得ない寝言にツッコみつつ、青年はグレンファイヤーを叩き起こした。

「いつてえ！？ なにすんだよ！？ あっ？ お前、誰だ？」

「ジャンボットだが？」

その青年は自分が「ジャンボット」であると言ってきた。

「なにいいいい！！！？ 焼き鳥！？」

「焼き鳥では無い、ジャンボットだと言っているだろ！！ ほら、水を持ってきたぞ」

実はジャンボット、身体を縮小させる機能がジャンボットの状態で使えることが出来るらしく、もしもの場合は人の姿に変わる機能まであったらしいのだ。

そして、ジャンボットの容姿はガンダム00のティエリア・アーデ似であり、グレンファイヤーを起こして歩き始める。

「ゼロ達は？」

「分からない、はぐれてしまったようだ」

ジャンボットはグレンファイヤーに此処はゼロの言っていた地球だということの説明し、ゼロの師匠「ウルトラマンレオ」の話を聞いたことがある為、一応地球人らしい名前を2人は考える。

「『岬 炎斬』。 どうだ？ カツケエだろ？」

「ナオの名前を借りて『鋼ナオキ』^{はがね}という名前で行くか」

「おい、無視すんな焼き鳥！ 焼くぞ！」

こうしてグレンファイヤーは「岬 炎斬」、ジャンボットは「鋼ナオキ」という名前が決定した。

彼等もまた歩き出し、森を抜けて街を歩き、人気のない場所を歩く。

「にしても腹が減った……。肉が食いてえ」

炎斬の腹が音を鳴らし、腹を手で押さえた。

「しかし、この星の金などは無いし……。どうしたものか。私は一応別に何も無くても大丈夫なのだが」

そして耐えきれなくなっただのか、また炎斬は道端で倒れてしまう。

「グレンー!!」

*

一方、炎斬とナオキを探しているランと鏡太はまた先程と同じ、かなり広い公園に戻って来ていた。

「グレンもジャンボットも見つからねえな」

「……」

静かに林ばかりがある場所を見る鏡太。

「どうした？ ミラー……鏡太？」

「ああ、林の中でなにか聞こえたような……」

その時、林の中からなにかが爆発するような音が聞こえ、ランと鏡太は急いでその場所に向かう。

そこでは、変わった服装をした少年が黒い怪物と戦っており、怪物は少年に襲い掛かるが少年は右手からバリアらしきものを展開。

だが、ランと鏡太が乱入して怪物を思いっきり蹴り飛ばした。

「うおおお!!」

【グオオオ!!?】

「ええっ!？」

ランと鏡太の乱入に、驚きつつも、鏡太が少年に駆け寄る。

「君、大丈夫か!？」

「あつ、はい……」

「ここは僕達に任せて君は逃げるんだ」

しかし、少年は「いや、でも……」となにか言いたげだが、ランは左腕の銀色のブレスレット、「ウルティメイトブレスレット」からメガネ型のアイテム「ウルトラゼロアイ」を取り出す。

「ゼロ! この少年の前で変身するのは……」

「仕方ねえだろ! 生身でどうこう出来る相手じゃねえ!」

ウルトラゼロアイを目に装着し、ランは光に包まれてゼロの姿となり、頭に銀色の2本のブーメラン「ゼロスラッガー」が装着され、赤と青の身体を持つ等身大の「ウルトラマンゼロ」に変身し、すぐさま怪物を殴り飛ばした。

「シユアー!!」

【グゴオオ!!??】

両手をコキコキとな鳴らし、ファイティングポーズを構えるゼロ。

「テメーの相手は……俺がしてやるぜ!!」

第1話 『ウルティメイトフォース・ゼロ』（後書き）

炎斬の寝言はもちろん声ネタですw

第2話 『Wの変身/2人で1人の仮面ライダー誕生』

光の国の戦士、ウルトラセブンが息子、「ウルトラマンゼロ」は一気に黒い怪物に突っ込んで行くとは強烈なパンチをお見舞いする。

「デリヤアア！！！！」

【グゴオ！！？】

さらにゼロは怪物に廻し蹴りを食らわし、頭部に強烈チョップと次々強力な技を打ちこんで行く。

「シユア！！！」

【ギシャアアア！！！！？】

怪物が身体から黒い弾丸をゼロに放ってくるが、ゼロはそれらをなんとか避け、頭の上にあるブーメラン、ゼロスラッガーを怪物に投げつける。

「シエア！！！」

ゼロスラッガーは怪物を切裂き、真っ二つになったが、真っ二つの身体はまた元の1つの身体に戻り再生してしまった。

「なに！？！」

「再生した！？！」

戦いの様子を伺っていた鏡太も驚き、鏡太の隣にいる少年は「ダメだ、それじゃ……」と呟く。

「これならどうだ!!」

腕をL字に組みあわせ、必殺光線である「ワイドゼロショット」を怪物に発射し、怪物はあちこちに破片となって飛び散り、その破片は地面に当たると地面が凹んだり、木に当たると木が倒れたりして消滅したかに思われたが、再び再生し、身体から帯らしきものを出してゼロの両手、両足を拘束する。

「なに!? 離せ!!」

怪物を動きを封じたゼロに飛びかかる。

「ラン!!」

鏡太が助けに行こうとするが、それよりも先に少年が飛び出し、ゼロの前に立つ。

「バカ! 来るんじゃない!!」

「くっ!!」

少年は右手を怪物の前にかざし、バリアらしきものを展開して怪物の攻撃を防ぎ、なにか呪文のようなものを呟いて行く。

「ジュエルシード、封印!!」

バリアに弾かれた様に怪物はゼロを解放して吹き飛び、何処かに逃げようとするが少年がチェーンのようなものをバリアから出して怪物を拘束。

「今です!!」

「やるじゃねえか」

ゼロはゼロスラッガーをカラータイマーの両側に装着し、そこから放つ光の光線「ゼロツインシュート」を怪物に直撃させる。

「逃がすかよっ!」

【ギシャアアア!?!?!?】

怪物はゼロツインシュートの衝撃でチェーンが破壊され、怪物はかなりの距離を吹き飛んでしまい、結局逃がしてしまった。

（今の状態だと、弱らせるのが最優先だな……）

少年はそう思いながら急いでその怪物を追いかける。

「逃がしてしまったか」

ランの姿に戻ったゼロに、鏡太が駆け寄る。

「ああ。それにしても、アレとお前の正体はなに……ってあり？」

ランと鏡太はあの少年を探すが見当たらず、この公園の中を探しまわったが、結局見つからなかった。

*

その頃、「高町家」という表札がある家。

「んっ？」

高町家の家のある部屋で、メガネをかけた頭にクリップをつけた少年「高町ライト」^{たかまち}がなにかを感じた。

「この世界に、なにか来たようだね……」

それと同時に、彼の義理の姉である「高町なのは」はある夢を見ていた。

『誰か……僕の声聞いて！』

それは先程の戦闘がなのはの頭の中に流れており、赤い宝石を首にぶら下げたフェレットが誰かになにかを訴えかけようとしていた。

「朝だよ姉さん、起きないと」

「ふえ！？」

気付けばもう朝、なのははライトに起こされ、半分寝ぼけながら姉の「高町美由紀」^{たかまちなみゆき}、兄の「高町恭介」^{たかまちなきよすけ}、父の「高町士郎」^{たかまちしろう}、母の「高町桃子」^{たかまちなももこ}と朝食を済ませ、友人の金髪の少女「アリサ・バニングス」^{つきむら}と紫の長い髪の少女「月村すずか」と共に聖祥大付属学校にバスに乗って向かった。

そのバスにはライトも乗っているが、彼は隅っこで外を眺めてるだ

けであり、なのはやアリサ、すずかの会話に入ろうとしなかった。

「アンタも少しはなにか話したらどうなのよ？」

アリサがライトに言うが……。

「僕はそういうのが苦手なんだ。ごめんね」

ライトは申し訳なさそうにするが、アリサはため息をついてなのはとすずかと再びお喋りをしだす。

（ライトくん、どうしてあんなに他人を避けるのかな？）

すずかはライトに対してそう思い、一方でのランと鏡太は……。

*

「は、腹が……減って……」

「水……水で腹を満たせば……、でもやっぱり満ちた気がしない」

あの公園で一夜を過ごしており、ランはベンチでぐったり倒れ、鏡太はフラフラしながらも水を飲みに行こうとする。

因みに元の世界に帰ってセブン達にジャンボットとグレンファイヤーの搜索を手伝って貰おうとウルティメイトブレスレットの力をおうとしたが、力が足りないのか、次元を超えなかった。

さらに言えば、ここが自分達のいた世界の地球ではないか調べた所、かつて地球を訪れたウルトラマンを知る者は誰1人としていなかった。

なお、ランが戦闘を行った場所はボロボロであり、警察などが来ており、立ち入り禁止になっているが此処までは立ち入り禁止にはなっていない。

鏡太もあまりにも空腹な為、鏡太は倒れこむ。

そこへ偶然通りかかった茶髪のチャージを着た男性が2人に声をかける。

「大丈夫か!？」

その男性は「トゥモロー・リサーチ」と呼ばれる何でも屋を経営しており、2人を担いでそこまで運んだ。

「ウメーぞコレ!!」

「申し訳ありません、お世話になってしまい……」

ランはコンビニで男性……「浅見竜也^{あしみたしや}」が買ってきた弁当を美味しそうにガツガツ食べており、鏡太も竜也が買ってきて食べながら竜也に申し訳無さそうにしていた。

『お食事タイム!!』

「うおッ！？　なんだコイツ！？」

両腕を同時振り上げたりする小型のロボ、「タイムロボター」に驚くラン。

それに引き換え、鏡太は特に驚いていなかった。

ランもよく考えればロボターよりも凄いロボットや、他のウルトラマン達から聞いた兵器を知っていた。

ジャンボットとかメテオールとかガ○ダムとか。

「待て待て！　今なんか明らかにおかしいのがあったぞ！」

「誰にツッコミを入れてるんだラン？」

竜也はロボターを持ち上げてテーブルに置く。

「ああ、こいつはな、故郷に帰った俺の仲間が作ったロボットなんだよ」

どこか懐かしそうに、楽しそうに話す竜也。

「すいませーん、ジェット便です」

とそこへここへ宅配にきた男性が入ってきた。

「あつ、天馬！」

男性の名前は「くどう てんま工藤天馬」という名前であり、決められた時間内に宅配ものを配る宅配便である。

「荷物持ってきました竜也さん」

小さな段ボールの荷物を笑いながら竜也に渡した後、天馬はランと鏡太を見る。

「えーっと、隠し子？」

「なにをどうしたらそうなるんだよ!？」

苦笑いしながら言う竜也、その後、天馬はバイクに乗って仕事に戻り、竜也に「家とかはどこ？」と質問され、困り顔のランと鏡太だが、仕方なく鏡太は自分達には帰る場所が無いと説明。

竜也は敢えてその理由を聞かなかった。

「帰る場所が無いならここにいていいよ。でもさ、話す気になつたらちゃんと俺に言ってくれよ?」

ランと鏡太の肩を優しく叩き、笑顔を向ける竜也。

「どうして……」

「まあ、見た感じ、君等家出かなんかだろ? 俺も家出中だし、だから俺が注意したら『お前が言うな!』って感じになっちゃうからさ」

苦笑いする竜也。

そしてランと鏡太はトゥモロー・リサーチに住む事になった。

*

その深夜の出来ごと、ランと鏡太はなにかを感じたのか、目を覚ました。

「ラン……」

「お前も感じたか」

外に出てランと鏡太はそのなにかを感じた場所へと走って行った。

空を見上げれば空の色は茶色い。

明らかに異変が起きている証拠だろう。

とある「獅子動物病院」というその名の通りの動物病院で、学校帰りに夢でみたあの傷付いたフェレットを発見し、それをここの獣医である「獅子走」ししかけるに診て貰った所、命に別状は無く、一度ここでフェレットを預かって貰うことにした。

しかし、なのはと念の為ということで何かが入ったアタッシューケースを持ったライトは此処から誰かが呼んでいる気がした為、ここへまで来た結果、あのフェレットがランが一度は撃退した怪物に襲われており、なのはに向かって飛びこんだ。

「な、なにアレ!？」

「来て……くれたの？」

「えっ？」

フェレットがいきなり喋ったことに動揺するのは、対するライトはフェレットにかなりの興味を持った。

「興味深い! 喋るフェレット! ゾクゾクするね」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょライト!!」

なのははフェレットを抱えてライトと共に逃げだす。

フェレットの話によれば、ある物を集める為に此処とは違う世界からやってきたそうだ。

そしてなんでもなのはには「魔法」の資質が高いらしい。

「魔法……?」

「魔法!? それは一体どんなのだい!!? 是非とも教えてくれ!」

(ライトの検索バカが)

少々ライトの今の状況とは裏腹に楽しそうに喋る為、なのははライトに少し呆れていた。

「取り合えずこの子のことは気にしないでいいから」

「えっ? あっ、うん。兎に角、君には資質がある。だから僕

に力を貸して! お礼は必ずしますから!」

「お礼とかそんな場合じゃ……っ!？」

そこへあの怪物がなのは達に襲い掛かって来たが、突如現れたランと鏡太の飛び蹴りを喰らい、怪物は蹴り飛ばされた。

（アレ？ デジャヴ？）

とフェレットは思った。

「まゝたデメーか」

「ラン、分かってると思うが……」

ウルティメイトブレスレットからウルトラゼロアイを取り出すラン。

「いや、そう易々と人がいる前で正体を明かしていいのかラン！？」

鏡太のツッコミを無視し、ランは変身しようとするが、怪物の放った帯の攻撃を手に喰らい、ウルトラゼロアイが飛ばされてしまう。

「つてえ！？ ヤローー！！」

「予習してますね……」

ランはウルトラゼロアイを取りに行こうとするが怪物は帯を伸ばし、ランと鏡太を叩きつける。

「「うわあー！？」」

「止むを得ないかな……」

ため息をついたライトはランの元に駆け寄る。

「ライト！ まさか……！！」

なのはライトがなにをしようか分かった。

ライトは倒れこんでいるランの元に駆け寄り、アタッシュケースを見せる。

その中には6本のUBSメモリのような「ガイアメモリ」があり、そして赤いバツクル、「ダブルドライバー」が入っていた。

「それは……」

「悪魔と相乗りする勇氣、あるか？」

ライトの言葉に戸惑いつつも、ランはダブルドライバーと黒いガイアメモリ「ジョーカーメモリ」を掴む。

ライトはダブルドライバーの使い方を手短に説明し、その間に鏡太が怪物を引きつけ、フェレットもなのはにあの赤い宝石を渡して手短に説明をすると、ランはダブルドライバーを装着すると同じものがライトの腰にも現れる。

緑のガイアメモリ、「サイクロンメモリ」をライトは持ち、ジョーカーメモリとサイクロンメモリのスイッチを押すとガイアウエスパーが鳴り響く。

【グル……？】

『サイクロン！』

『ジョーカー！』

そしてガイアメモリを2人はダブルドライバーに差し込む。

「「変身!!」」
『サイクロン・ジョーカー!』

ライトのダブルドライバーに差し込まれたサイクロンメモリはランのダブルドライバーに転送され、ライトは目を閉じて倒れるとランの身体が変わって行き、右は緑、左は黒、額には「W」と書かれたマーク、両目は赤の「仮面ライダーダブル・サイクロンジョーカー」に変身した。

「なんだよコレ……、マジで変身した」
『これがダブル……、仮面ライダーダブルだ』

右目が点滅し、ライトの声が聞こえる。

一方、なのはもフェレットから魔法の説明を聞き終えた。

「僕と同じことを続けて喋って!」
「う、うん」

フェレットが呪文を唱え、なのはもそれに続く。

「レイジングハート、セットアップ!!」

最後にそう叫ぶと桃色の光に包まれてなのはは聖祥の制服に酷似したバリアジャケットと呼ばれる服を着た。

宝石は「レイジングハート」という杖に変化し、なのはは突然の事に戸惑いまくる。

「ふええええ!!!? どうなってるの!?!」

「落ちついて僕の言うことをよく聞いて！」

だが、怪物が黒い帯を伸ばしてなのはに攻撃してきたが、なのはは咄嗟にレイジングハートを構えるとレイジングハートはバリアを展開して攻撃を防ぎ、そこへダブルが両足に風を纏わせた蹴りで帯が千切れる。

【グオオオオ!!?】

「スゲーな、これ！ んっ？」

ダブルは足元に落ちていたウルトラゼロアイを回収し、そのまま怪物に突撃する。

『僕達が奴の動きを封じる、その隙にそのフェレットからの対処法を聞いてくれ姉さん』

「う、うん」

ダブルは怪物へと突っ込んで行き、帯でダブルを叩きつけようとしたがダブルは高く飛び上がり、ストレートパンチを怪物に叩きこむ。

【グボ!?!】

『ここは一気に決めるよ、君、名前は?』

「モロボシ・ラン」

ジョーカーメモリを引き抜き、右腰のマキシマムスロットにメモリを装填する。

『ジョーカー！ マキシマムドライブ!』

ダブルの周りに風が纏い、空中へ浮かぶとダブルは右半分、左半分

に分かれてキック……「ジョーカーエクストリーム」を怪物に繰り出した。

「ジョーカーエクストリーム!!」

【グルアアアア!!!!?】

そこでフェレットからの合図があり、なのはのレイジングハートからピンク色のリボンが放たれ怪物を拘束。

「ジュエルシード、封印!!」

怪物にレイジングハートをかざすと怪物は消滅していき、弾け飛んであちこちに破片が飛び散る。

【ギシャアアアア!!!!?】

そしてレイジングハートの中に青い宝石のような「ジュエルシード」が入り込む。

その後、変身解いたランはライトも目を覚まし、空も元の色に戻り、パトカーの音が聞こえ始める。

周りを見れば辺りをボロボロ……。

「ま、まずいよ! 急いでここから離れないと!」

「ああ、落ちついた場所で色々話し聞くぞ!」

そしてラン、フェレットを抱えたなのは、鏡太、ライトはすぐさまそこから離れてあの公園へと向かった。

第2話 『Wの変身/2人で1人の仮面ライダー誕生』(後書き)

竜也はランと鏡太の親代わりに……。

次回予告

アंक

「はっ！？ ここはどこだ!？」

フェイト

「怪獣……?」

かざかみひかり
風上光

「可愛いでしょ?」

カオスリドリ阿斯

「キエエエエ!!!!」

光

「僕と一緒に……戦ってくれる? コスモオオオオス!!!!」

次回『鳥怪人と金髪少女と優しさの巨人』

第3話 『小さな勇者』（前書き）

タイトル変わった……。

次回もコスモスだけど中心なのは……？

ハードボイルドなライダーも登場。

OP「Spirit」

ED「ウルトラマンコスモス〜君にできる何か〜」

友好鳥獣リドリアス

カオスリドリアス

登場。

第3話 『小さな勇者』

「またこの公園にくることになるとはなあ」

再び嫌な思い出しが無い公園へと来たランと鏡太。

そこにはなのは、ライト、フェレットがいる。

「んでっ？ 事情を話して貰おうか。 まず、ありやなんだ？」

ランの質問に、フェレットは答える。

「あれはジュエルシード」

「ジュエルシード？」

ジュエルシードとは、フェレット……「ユーノ・スクライア」が発掘した遺跡なのだが、大変危険なものな為、船で運んでいた所、何者かの攻撃を受けてジュエルシードは全てこの世界へと来てしまったのだ。

そしてユーノは本当は1人で責任を持って集めようとしていたが、やはり1人では無理があつたのだ。

「そついう君達は、何者なんですか！？」

ユーノの質問にランと鏡太はどう答えていいか分からず、ライトは取り合えずダブルの説明だけはしておくことに。

「あれは仮面ライダーダブル。 僕も君と同じく、別の世界からき

たんだ。 とある仮面ライダーに助けられてね」

ライトはその昔、別の世界でダブルが使用しているのとは別のガイアメモリ、人間を怪物へと変わるガイアメモリをライトの力を使い、「ミュージアム」と呼ばれる組織は制作していた。

ライトの能力とは彼の頭の中には「地球の本棚」と呼ばれる地球の全てとっていい程の知識が詰まっている。

だが、ライト自身もそれら全てを閲覧した訳ではないのだ。

そしてライトはガイアメモリを作るのを良しよせず、何度も逃げだそうとしては失敗。

しかしある時、1人の仮面ライダーが自分を助けてくれた。

ミュージアムがガイアメモリを制作しているビルに白い帽子を被った顔が渋い男性がライトを救いだす為潜入してきたのだ。

その男性の名は……「鳴海^{なるみ}壮吉^{そうきち}」。

壮吉はライトを探すが途中、幹部である黒服の男達に囲まれてしまふ。

「ふう……」

複数の男性達に囲まれ、全員殺気を出しまくっているにも関わらず、壮吉は余裕の態度を見せていた。

一斉に男性達が壮吉に殴りかかってきたが壮吉はそれら全てをかわ

し、それ所が自分に襲い掛かってきた男性にはかならず一撃や二撃はパンチなどを決め込んでおり、次々と倒れて行く男性達。

「うおおおお!!!」

男性の1人が飛び蹴りを放ってくるが、壮吉も帽子が落ちない様に抑えながら飛び上がって飛び蹴りを放つ。

結果、壮吉の蹴りのみが男性に叩きこまれ、蹴り飛ばされる。

「ぐわああ!!!?」

「フツ」

蹴り飛ばされた男性は立ち上がり、1本のガイアメモリを取り出す。

『マスカレイド!』

それを首筋に当てると男性はタキシードを着た黒い怪人「マスカレイド・ドーパント」となり、さらに複数のマスカレイド・ドーパントが現れ、さらには上半身は女性、下半身は芋虫のような「タブー・ドーパント」が現れる。

「こんな所にノコノコやってくるなんて……フフ」

タブーは壮吉に対して笑うが、壮吉は態度を崩さない。

「撃つていいのは撃たれる覚悟ある奴だけだぜ、レディ?」

「んっ?」

「ガイアメモリを仕事に使わないのが俺のポリシーだったんだが、止むを得まい」

壮吉はダブルドライバーのメモリを差し込む場所、メモリスロットが1つしか無い「ロストドライバー」を腰に装着し、「S」と書かれたガイアメモリを取り出す。

『スカル!』

「変身」

帽子を一度手にとって取り、メモリをスロットに差し込んで傾ける。

『スカル!』

壮吉は姿を変え、骸骨を思わせる黒いライダーへと変身し、最後に帽子を被って壮吉は「仮面ライダー スカル」に完全に変身した。

スカルは右の人差し指をタブーに向ける。

「さあ……、お前の罪を、数えろ!」

マスカレイド達が一齐にスカルへと攻撃を仕掛けるがスカルは殴りかかってきたマスカレイド一体の拳を受け止め、空いている腕でマスカレイドを殴りつける。

「トウ!」

「「うおおお!」」

2体のマスカレイドがスカルの背後に迫って来たが、スカルは廻し蹴りで一気に2体を蹴り飛ばして壁に叩きつけ、もう2体のマスカレイドの首を掴みあげる。

「おのれ……！」

タブーの放った赤いエネルギー弾がスカルに迫るがスカルは今掴みあげているマスカレイドを盾に使い攻撃を防いだ。

そこで銃型の武器、「スカルマグナム」を取りだし、タブーと撃ち合いとなる。

「んっ？」

スカルは偶然ここを通りかかったライトを発見し、タブーをなんとか巻いてライトの元へ向かった。

「自由になりたいか？」

そして牢屋のような部屋でジツとしているライトを発見したスカルがライトに問いかける。

ライトは頷き、スカルはライトにその手を差し伸べた。

「これからはお前の自由なように決める。自分の生きる道を自分で決める権利はあるからな」

そして壮吉はこの世界にいては何時までもミュージアムが追ってくると思い、ある者の力を借り、この世界の高町家へと預けた。

家族の温もりを感じさせるのは、高町家が1番だったからだろう。

*

そして現在、とある一軒家で炎斬は目を覚ました。

「メーガレンジャー!？」

と何か寝ぼけていたが。

「目覚めたのか、炎斬!」

そこへナオキがやってきた。

「あつ? 焼き鳥……俺は……。うう、腹減った」

炎斬はお腹を鳴らし、そこに1人の少年が入ってきた。

「あつ、目が覚めたんだ」

コードギアスの枢木スザクかざかみひかり似の少年で、首には紐で通した青い意思をぶら下げて、名前は「風上光」である。

光は倒れている炎斬を見つけてナオキと共に此处まで連れてきた。

「食事、出来てますから食べていいですよ」

炎斬に光は微笑み、炎斬は「おお！ サンキューー！！」とお礼を言った後、食事があるリビングに直行した炎斬だった。

「すまない、こんな見ず知らずの私達をなにも聞かずに泊めてくれて……」

「ううん、僕、1人暮らしたから今まで、だから誰か来てくれた事には嬉しいんだ」

「1人って……家族はどうして……」

両親と兄は3年前に他界、今は親戚の仕送りで生活している。

なぜ親戚と暮らさないと聞いた所、親戚は大家族らしく、光曰く「迷惑かけたくないから、だから仕送りだけで十分」とのこと。

「それじゃ僕は用事があるから」

それだけ言っと光は家を出て出かけた。

*

とある森の中、そこでは巨大な鳥の怪獣、「友好鳥獣リドリアス」が木に隠れて大人しくしており、それを不思議そうに見る黒い服の

金髪の少女「フェイト・テストロッサ」と狼の耳と尻尾を生やした女性「アルフ」。

「これは……？」

リドリアスを不思議そうに見るフェイト。

「フェイト、危なそうだからさっさとここを離れようよ」

因みにリドリアスは眠っている。

「うーん……、そう、かなあ？」

「いいから早く行こうって！ ジュエルシードも無いみたいだし！」

どうやらこの2人もジュエルシードを探しているらしい。

「でも、この子……優しい子な気がする」

するとリドリアスは目を覚ました。

「クエエ」

「ほら！ 目覚めちゃったよ！？」

心配するアルフだが、リドリアスは舌を出して優しくフェイトの頬をペロツと舐めた。

「ひゃっ！？」

「クエエ」

フェイトは一瞬戸惑ったが、特にリドリアスが襲ってくる気配が無

い。

「可愛いでしょ?」

突然のその声にフェイトとアルフは振り返るとそこには光があり、青い意思をグルグル回すと不思議な音が鳴り、リドリアスは何処か気持ち良さそうにしていた。

「リドリアスはね……。 あつ、リドリアスってこの子の名前なんだけど。 この音が好きなんだあ」

「へえ」

なぜかフェイトやアルフもその音を聞き、心が安らぐ感じがしていた。

だがその時、上空に光の粒子が複数現れた。

「なんだいアレ!？」

「綺麗……」

アルフとフェイトは粒子にそんな感想を述べるが、その粒子……「カオスヘッダー」はリドリアスに取りつく。

「キエエエエ!?!?」

「リドリアス!? どうしたんだ!？」

急に苦しみ出すリドリアスに石を振りまわして落ち着かせようとする光。

だがリドリアスの顔は赤く、凶悪なものとなり、さらには爪が鋭く

なった「カオスリドリアス」へと変貌してしまう。

「ギエエエ！！！」

カオスリドリアスは翼を広げて飛び立ち、市街地へと向かう。

「リドリアス！！ そっちはダメだ！！」

光は急いで街の方へ走る。

「あつ、待つて！」

「フエイト！」

フエイトとアルフもリドリアスが気になる為、光について行く。

カオスリドリアスは市街地に現れ、口から青い光線を吐きだして街を破壊していた。

「ギイイイエエエ！！！！」

さらには戦闘機が現れ、カオスリドリアスに攻撃を仕掛ける。

「やめて！！ リドリアスを攻撃しないでください！！」

戦闘機に向かって叫ぶが、そのパイロットは光の存在に気付く筈も無かった。

「リドリアス！！」

光は石を振りまわしてその音をカオスリドリアスに聞かせ、カオス

リドリアスの顔は元のリドリアスの顔に戻るが、それだけでは戦闘機での攻撃は止まず、リドリアスは再びカオス化してしまう。

「リドリアス……」

カオスリドリアスは光に向かい、青い光線を放ってきた。

「うわああああ！！！！？」

伏せて自分の死を覚悟する光。

（これで……僕も父さんや母さんに、兄さんの所にいけるのかな？
いや、まだだ、まだ僕は……諦めない！！）

その時、光線が光に直撃するよりも早く、宇宙からきた青い球体に、光は包まれる。

そしてカオスリドリアスの光線は光のいた場所に直撃し、爆発が起きる。

だが、光は青い輝く空間の中にいた。

「光……、また会えたな」

「コスモス……」

光の前に現れたのは、青い身体を持ち、胸にゼロとも似たクリスタルがある巨人が光に話しかけた。

彼と巨人は1年前、ある戦いを通して絆を深めていた。

「すまない、光。君を助ける為といえ、まだ幼い君に……」

申し訳なさそうに謝る巨人。

「いいんだコスモス、僕はリドリアスを助けたい、僕に……リドリアスを助ける力を！！僕は君になりたい！真の勇者になりたいんだ！！コスモオオオス！！！」

光の持っていた石が変化し、コスモスの蕾のようなスティック、「コスモプラック」を光は握りしめ、それを掲げるとコスモプラックは花を咲かせるように開き、青い空間から光は巨人と同化して「ウルトラマンコスモス・ルナモード」へと変身した！

「シェア！」

カオスリドリアスを戦闘機による攻撃から庇う様に、コスモスが現れる。

コスモスは先程言った戦いで、英雄的存在になっている為、戦闘機はすぐに攻撃を中止。

「キイイイ！！！」

カオスリドリアスがコスモスにその爪で攻撃して来たが、コスモスは避けてカオスリドリアスの背後に回り込む。

「キエエエ！！！」

「シュワッ！！！」

カオスリドリアスは腕を振るってコスモスに殴りかかったが、コス

モスは受け止めカオスリドリアスの腹部に右手をつけて押し返す。

「シエアッ！」

カオスリドリアスの攻撃は一切受けつけず、コスモスはカオスリドリアスの腹部を叩いて押し返して行き、カオスリドリアスは口から光線を放つがコスモスは受け止め、光線を弾く。

「ヘアッ！！！」

コスモスは「ルナスル・アイ」という怪獣の体内を見る技で、リドリアスにとり憑いたカオスヘッダーの居場所を特定し、そこから光の光線「ルナエキストラクト」を放ち、カオスヘッダーはリドリアスと分離させ、カオスヘッダーは消滅した。

「キエエエ」

苦しみから解放されて嬉しそうなリドリアス。

コスモスは頷くと、両手を広げて青い光の波をリドリアスに注ぐと、リドリアスの身体は薄くなり、そこから消え去ってしまう。

実はこの技、リドリアスを人がいない無人島へと移す技だったりする。

「シエア！！！」

そしてコスモスは飛び立ち、空の彼方へ消えて行った。

フェイトとアルフは光の姿を見失い、先程のコスモスの戦いを見て

いた。

「あの怪獣、どこに行っただろう……？」

「分かんないけどさ、取り合えず、ジュエルシードを探そうフェイト？」

「……うん」

フェイトはリドリアスも気になるが、光のことも気になっていた。

彼がどこに行っただのか……。

*

一方、その頃、この森の中で赤い鳥の様な、顔の右側が金色のトサカとなっている怪人「アंक」が倒れこんでいた。

「うっ……んっ？　なんで俺は、こんな所に！？　俺の意思の入ったコアメダルは映司が持つてる筈……！」

アंक……、「グリード」と呼ばれる怪人の1人であり、彼はその中の鳥の属性を持つ者。

彼の身体は銀色のメダルである「セルメダル」と9枚揃うと事で完全な復活をする為と身体を構成するメダル「コアメダル」で成り立つ怪人であり、アंकはある戦いにおいて恐竜系グリード「ギル」と「仮面ライダーオーズ」と共に倒したが、その時の衝撃のせいか、異次元へとアंकの殆どのコアメダルは破壊され、さらには彼の意

思が入った割れたメダルはそのオーズが持っているのだが、何故か彼は此処に存在していた。

しかも、壊れた筈のコアメダルも1枚を除き、殆ど直っている。

「兎に角、歩いてみるか」

取り合えずアंकは金髪のガラの悪そうな男性に変身し、歩き始めた。

第4話 『パンツとメダルと強き太陽』（前書き）

挿入歌1「Time judged all」

挿入歌2「Touch the Fire」

カオスヘッダー

古代怪獣ゴルメデ

カオスゴルメデ

登場。

第4話 『パンツとメダルと強き太陽』

アंकは海鳴市の街を歩き、辺りを見回してみる。

（……何故だ？ 普通なら俺の見るものは全て灰色にみえる筈）

グリードはメダルの怪物、即ち、なにを触っても、なにを見ても、なにを食べても、なにも感じない怪人である。

だが、そのグリードの1人であるアंकは何故かその逆になっていた。

普通ならば周りに見えるもの全ては灰色に見えるはずなのに、ちゃんと色がある。

ちゃんと見える。

そのことが不思議でなかった。

（まあ、もう人間の身体を使うって気分にはなれなかったし、結果オーライって所か……）

さらにアंकはある物を取りだした。

「なんでこれまであるんだか……」

その時だ、突然アंकは緑色の雷を喰らい倒れこむ。

それと同時に周りにいた人々は逃げ惑う。

「ぐっ!?!」

だがすぐに立ち上がるアंक。

「誰だ!?!」

「久しいなあ、アंक」

「お前は……!」

緑色の虫の怪人「昆虫系グリード・ウヴァ」である。

そう、みんなの「ウヴァさん」である。

「ウヴァ!?! なんてテーマまでいるのか分からねえが、お前のメダルは持っていないぜ?」

「そんなことは知っている。だが、お前には消えて貰おうと思っ
てな!?!」

ウヴァの元にカマキリの性質を持つメダルで出来た怪人「カマキリ
ヤミー」、アゲハ蝶の性質を持つ「アゲハヤミー」が現れる。

アंकは怪人体となり、アゲハヤミー、ウヴァ、カマキリヤミーに
戦いを挑む。

*

光の家では光は洗濯物を外で干しており、炎斬とナオキは家事の手伝いをしていた。

「所で光……」

「はい？」

ナオキが光に呼びかけ、ナオキはある質問を光にぶつける。

「なぜ、パンツ干していないのだ？」

光が干してるものは全てパンツ（トランクス）だった。

「いやあ、だってパンツはかなり大事なものですから！ 明日のパンツさえあれば大丈夫なんですけど、予備とか必要かなって」

ナオキは頭に疑問符を浮かべており、光はそのままパンツを干し続ける。

「予備ってどんだけいるんだよ、パンツ」

炎斬は冷やかなツツコミを入れた。

だが、その内の1枚が風で飛ばされてしまい、光は慌ててそのパンツを追い掛けた。

「あーっ！！ 明日のパンツウー！！」

「いや1枚くらいよくね！？」

炎斬のツツコミは聞こえず、光はそのままパンツを追いかける。

その頃、海鳴市に近い山奥で1体の怪獣が地中で目を覚まし、偶然が必然か、地中を掘り進んで海鳴市に向かっていった。

*

一方、フェイトとアルフは今日もジュエルシードを探して気配が無いか街の中を2人で歩いていたのだが、その時、フェイトの元に1枚の布らしくものが降ってきてフェイトはそれを掴んだ。

「んっ？ なにこれ？」

フェイトが布を確認するとそれは……。

光が洗濯していたパンツだった。

「「ええ！！？」」

フェイトとアルフは当然驚き、すぐさまそれを隠すかのようにしまいいこむ。

「いや、なんで隠すのフェイト！？」

「だって変な子と思われたら嫌だし……」

確かに、女の子がトランクスなんて持ってたらしう思われても仕方

が無いのだが、もっと変に思われそうな者がくることになる。

「僕のパンツウウウウ！……！！」

泣きながら自分のパンツを探す光がフェイトとアルフの目に入った。

「アルフ、あの子……」

「ああ、この間の奴だね」

フェイトはもしかしてと思い、光の元に駆け寄る。

「あ……あ、あの！」

身内以外で殆どこうやって誰かと話すことが初めてのフェイトは戸惑いながらも光に声をかけた。

「んっ？ あっ、君あの時の！」

光が笑顔で「どうしたの？」と聞くとフェイトはトランクスのパンツを光に返した。

「君が持ってきてくれたんだあ！ ありがとう！！」

手を握られ、そこまで嬉しいのかと思うフェイトだった。

「えっと、どういたしまして……。それにしても、君無事だったんだ。それであの、リドリアスは……？」

フェイトはあれからずっとリドリアスの行方も気になっていた。

「リドリアスは今、人のいない島で大人しく暮らしてるよ。コスモスのおかげで！」

楽しそうに話す光に、フェイトは「コスモス？」と尋ねる。

「コスモスを知らないの？」

フェイトは頷き、コスモスのことをフェイトとそこにやってきたアルフに話し始める。

その時、ウヴァとヤミーの連帯攻撃を喰らって吹き飛ばされて転がりながら倒れこんだアंकが現れた。

「ぐがあ!？」

「な、なんだい今度は!？」

アルフがフェイトと光を庇う様に立つ。

それに気付いたアंक。

「お前等、危ないからすっこんでろ」

「えっ？」

光は怪人が自分達のことを気にかけるケースは珍しく、光はすぐにこの怪人、アंकが悪い怪人では無いことが分かった。

カマキリヤミーは両手の鎌でアंकに斬りかかるが、アंकは右手から炎を放ち、カマキリヤミーを攻撃。

「ギシャアア!!?」

しかし、その隙にウヴァがアंकの背後に立ち、アंकの背中にウヴァは腕をブツ刺す。

「うぐう!？」

「背中がガラ空きだぞ、アंकー!!」

そこからアंकのコアメダル2枚を奪い取るウヴァ。

さらにアゲハヤミーは空中から鱗紛をアंकに浴びせ、アंकの身体は火花を散らす。

「ぐわあ!？(クソッ、3対1な上にこっちはメダル2枚失った!…、どうするか)」

「うおおお!!」

すると光が太い木の枝を持ってウヴァに叩きつけた。

「なんだガキ? 関係無い奴は引っ込んでいろ!」

ウヴァは光を払いのける。

「うわっ!？」

フェイトとアルフが光に駆け寄る。

「大丈夫?」

「う、うん、平気」

光は立ち上がり、ウヴァを睨みつける。

「関係あるよ、その怪人、僕等のことを守ってくれてる。だから関係ある、今からの付き合いだし！」

（あいつ……少し似てるかもな、映司に……）

アंकは鼻で笑うと光にあるものを投げ渡した。

「これは……？」

「バカな、何故それまで！ そいつを寄こせ！！」

ウヴァが光にアंकから投げ渡されたものを奪おうとするが、黒い衣服に身を包んだフェイトが鎌型のデバイスと呼ばれる魔法を使うもの、魔導師が魔法を発動する時などに必要なアイテム「バルディッシュ・サイズフォーム」でウヴァを斬りつけた。

「ぐわああ！！？」

「君は一体……？」

「話は後で！」

さらにはアルフが魔力で出来た弾丸、魔力弾をカマキリヤミーに放つ。

「空中にいる奴は私とアルフが！」

「お前、これ使え！！」

アंकが赤いメダル3枚を光に投げ渡す。

「楽して助かる命が無いのって、やつぱりどこも一緒なのかな？」
（はん！ とことん似てやがるかもな）

光はアंकに渡されたものを腰に装着すると帯が伸びてベルトとなり、ベルト……「オーズドライバー」の中央に3枚のメダルを入れて右腰にあるオースキャナーと呼ばれるアイテムを手にとり、それと同時にドライバーの中央を傾けてオースキャナーで中央をスキャン。

「変身!!」

『タカ! クジャク! コンドル! タ〜ジャ〜ドル〜!』

頭はタカを思わせる「タカヘッドブレイブ」、胴体はクジャクを思わせる「クジャクアーム」、下半身がコンドルを思わせる「コンドルレッグ」、そして胴体の中央には鳳凰を思わせるマークがあり、赤い姿……「仮面ライダーオーズ・タジャドルコンボ」に変身した。

「はああ……!!」

「キエエエエ!!」

カマキリヤミーがオーズに攻撃を仕掛けるが、オーズは軽くかわし、カマキリヤミーを殴りつける。

「ハッ!」

「ぐわあ!?!」

ウヴァが爪型の武器でオーズへと斬りかかるがオーズはウヴァの腕を掴んで受け流し、両手でウヴァの腹部を殴りつける。

「やあああ!!」

「ぐおっ!?!」

その戦いを見ていたフェイトは、昨日のコスモスの戦い方と似てい

ると感じていた。

「余所見をするな――!!」

アゲハヤミーがフェイトに麟紛を放つがフェイトはプロテクションというバリアで防ぎ、フォトンランサーという金色の魔力弾をアゲハヤミーに放つ。

「フォトンランサー」

「ぐふう!？」

さらにはアルフがアゲハヤミーに接近してアゲハヤミーを思いつきりぶん殴る。

「おりゃああ!!」

「ぐはあ!!?」

ウヴァは炎属性が弱点、つまり、タジャドルの属性は「炎」、オースの方が有利である。

しかし、ウヴァは触角から緑の電撃を放ってオースを近づけさせない。

その隙にカマキリヤミーがオースを捕え、ウヴァがオースに攻撃を喰らわせようと接近するが、アंकの放った炎に吹き飛ばされるウヴァ。

「ぬわあ!？」

そしてオースはカマキリヤミーから無理やり抜けだし、強烈な蹴り

をお見舞いした。

「やあああ!!」

バルディッシュを斬りつけられ、アルフは強烈なパンチをアゲハヤミーに喰らわせ地面へと倒れこむ。

「ぐうう!!?」

カマキリヤミー、アゲハヤミーの2体が揃った所でオーズとフェイトは一気にトドメと行く。

『スキヤニングチャージ!!』

オースキヤナーで再びドライバーをスキャンし、オーズの背中に翼が現れてオーズは飛行しコンドルレッグはコンドルの足のように変化し、その足で敵を切裂く「プロミネンスドロップ」と、フェイトの放った魔力刃「アークセイバー」を2体のヤミーは喰らい爆発した。

「ぐわああああ!!!!?」

「チッ」

舌打ちしたウヴァはすぐにどこかへと走り去る。

変身を解くと光は倒れこんでしまう。

「ううう……」

「あつ、だ、大丈夫!?!」

フェイトが光を心配するが、アंकが……。

「心配すんな、コンボは体力を削るが命に別条はない」

それを聞いてフェイトは安心するのだった……。

だがその時、突然地響きが鳴り、地中から1体の巨大怪獣、「古代怪獣ゴルメデ」が出現。

「グオオオオー!!」

「ほお、あれが怪獣ってやつか」

アंकはゴルメデを興味深そうに見ている。

「それより早く逃げないと……!」

だが、光が身体を起こして立ち上がった。

「早く……怪獣を大人しくさせないと……、また攻撃されちゃう」

疲れ切った声で光はコスモブラックを取り出す。

（あつ、でもこの子達がいるし……。どうしよう）

ゴルメデは口から火球を吐きだし、暴れ出す。

「グオオオオーン!!」

（此処は……!）

光は突然走り出し、慌ててフェイト、アルフ、アंकもそれを追う。

「ちょ、ちょっと待って！」

「おい！！ 俺のメダル返せ！！」

光は3人をなんとか巻き、コスモプラックに語りかける。

「早くなんとかしないとまた怪獣が攻撃される。 だから、力を貸して、コスモオオオス！！」

コスモプラックを掲げると、コスモプラックが開き、青い光の中から「ウルトラマンコスモス・ルナモード」が現れた。

「シェア！」

「グルウ？」

ゴルメデはコスモスを睨みつけゴルメデはコスモスに向かい突進してくるがコスモスは避け、ゴルメデはコスモスが突然いなくなったように思いこみ辺りを見回す。

「グウ？」

後ろを振り返るとコスモスがあり、「ゴアッ！？」と鳴き声をあげて驚いた様子。

ゴルメデはコスモスに殴りかかるがコスモスは受け流し、両手でゴルメデの腹部を叩いて押し返す。

「シュア！」

「グオオン！！」

ゴルメデから距離をとり、右手から相手の感情を鎮める光の光線「フルムーンレクト」をゴルメデに放ち、ゴルメデは大人しくなる。

「グオオオオ……」

コスモスは頷き、リドリアスと同じ島に移そうと前回の技を出そうとした時、空中から光のウィルス、「カオスヘッダー」が現れてゴルメデに取りつく。

「ギオオオオ！！！！？」

「デヤッ！？」

カオスヘッダーはゴルメデにとり憑き、ゴルメデの生体エネルギーを吸収してゴルメデから離れる。

助けに行こうとしたコスモスは間に合わず、カオスヘッダーはゴルメデに酷似した凶悪な赤い頭を持つ「カオスゴルメデ」となって実体化した。

「ギオオオオオ！！」

弱り切ったゴルメデに火球を放ち、直撃を受けたゴルメデは倒れてしまい、目を閉じた……。

「はっ！」

コスモスはゴルメデに駆け寄り、抱きかかえるが、既に息は無い。

カオスゴルメデを睨みつけるコスモス。

「ハアア……シェア!!」

コスモスは拳を握りしめ、右手を掲げ、振り下ろすとコスモスの姿が変わり、赤き強さの姿、「ウルトラマンコスモス・コロナモード」にモードチェンジした。

「シェア!!」

カオスゴルメデに向かい走って行くコスモス。

「ギイオオ!!」

火球を放ってくるカオスゴルメデだが、コスモスに当たらず、コスモスは飛び上がったカオスゴルメデの背後に立ち、尻尾を掴んでスイングし投げ飛ばす。

「デアアッ!!」

「グルウ!!」

コスモスとカオスゴルメデは掴みあいになるが、コスモスはカオスゴルメデを掴みあげて背負い投げを繰り返した。

「ヘアッ!!」

「グアア!!」

ヨロツと立ち上がるカオスゴルメデに、コスモスは両手を前に突き出して放つ必殺光線「ブレイジングウェーブ」が放たれ、直撃を受けたカオスゴルメデは爆発四散。

「グオオオオオ!!」

コスモスはゴルメデを持ち上げ、空に高く飛び去った。

「シュアー!!」

*

光はフェイト達と再び会い、光は急にいなくなったことを謝っていた。

「そういえば、名前まだ言って無かったね。僕は風上光」

「フェイト・テストロッサ、こっちはアルフ」

光とフェイトは自己紹介し、アルフは「よろしく」とだけ言い、その後ろにいるアंकに目をやる光。

現在、アंकは人間態である。

「もしかして……さっきの怪人？」

「ああ、それよりさっさとメダルを返せ!!」

アंकに言われた通り、メダルを光は返し、その後フェイト達と別れてアंकは行く所が無いようなので光の家に居候することになった。

因みにアंकは格好のせい、炎斬とナオキから警戒されていた。

第4話 『パンツとメダルと強き太陽』（後書き）

次回はゼロサイドに戻ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9302y/>

魔法少女リリカルなのはMEGAMAXSAGA

2011年12月4日11時54分発行